

次席

絶望を希望に変える知

選択課題Ⅰ パンデミックの渦中であつて

福井愛朝

(千葉県／私立市川高等学校一年)

一 二〇二二年、盛夏

四〇度を超えていた。息が苦しかった。私の耳元では、オリンピックを開始する華々しい放送が流れていた。アナウンサーの興奮したその声を横に聞きながら、「新型コロナウイルスに感染するとはこのようなことか」と私は覚悟した。熱で朦朧とした頭で、次の日病院を受診した。

結果は陰性だった。扁桃腺炎という診断であつた。ほっと胸をなでおろしながら、ふと、昨夜のオリンピックの開会式の放送を思い出した。世界で一体どれだけの人が、私と同じように新型コロナウイルス感染症（以下「感染症」）の影に怯えながら、あるいは感染症の熱にうなされながら、あ

の開会式を見ていたのだろう。私はもちろん、オリンピックの開催に異論はない。しかし、オリンピックが閉幕した今でさえ、このようなパンデミックの渦中でオリンピックを開催したその是非について、人々の考えは二つに分断されたままだ。アメリカ社会がそうであるように、パンデミック以前より世界は、赤か青か、持てる者か持たない者か等、様々な分断に陥っていた。パンデミックは、その溝を更に大きく深刻にした。私たち人間は、この未曾有の危機に立ち向かうために、一つにまとまるどころか不信任を蔓延させ、不平等と二極化による分断を更に増幅させた。私は、このことに強い怒りを感じる。そして、このことに深い悲しみを覚える。一体、何が、誰が、

世界を分断したのか。

例えば、感染症が深刻になり始めた昨年より、未だに答えの出ない議論がある。感染の拡大を止め、多くの命を救うために、生活に困る者が出て経済活動を制限するの、か、また逆に多くの人の生活を守るために、感染が広がる危険があつても経済活動を制限しないのか、という議論である。単純にいうと「命を取るか、経済を取るか」という選択の問い（以下「問い」）である。実際はそこまで極端ではなくても、政府や自治体が行っている感染症対策やメディア等の主張は、この問いの両端を振幅している。そして悲しいことに、人々は選択の違いをめぐって対立し、分断している。

しかし、そもそもこの問いは正しいのだろうか。本稿第二項で、最初にこの問題を取り上げる。なぜならこの問題こそ、現在世界が抱える分断による二極化を象徴しており、この問題の解決が、パンデミックの渦中にある私たちの進むべき方向と、分断による二極化の問題の解決を指し示しているからだ。次の第三項では、それをより明確にするために、経済的な不平等の問題について取り上げ、その解決策について考察する。そして、不平等の解決が、パンデミ

ツクの渦中にいる私たちの明るい希望となることを示したい。最後の第四項では、このパンデミックがもたらした意味を踏まえ、私たちは未来に向けて何ができるか、自分の決意を述べる。

マルクス・ガブリエルは、「私たちは皆、他者の苦しみに責任がある」(注1)という。グローバル化が進み、世界中の人々が経済という糸で繋がっており、その経済は皆を全て幸福にするのではなく、一部の幸福が一部の不幸を前提に成り立っている、という意味である。そこから不平等が生まれ、不平等は分断を生む。私は、この連鎖を断ち切り、皆が幸福になれる世界を作りたい。このパンデミックの渦中で? いや、パンデミックの渦中だからこそ、見えるものがあるはずだ。本稿の目的はそこにある。

二 命を取るか、経済を取るかの誤謬

そもそも命も経済も人にとって大切なものであり、両立したいと誰もが願うのは当たり前だ。パンデミックは、この当たり前を当たり前ではなくした。パンデミックの渦中にいる私たちの多くは、命と経済は両立不能のものであると考えている。それゆえ、政策も人々の考えも、命と経済のどち

らにどれだけリスクをさけるか、その配分量を計算し、両端内を振幅するように狭く窄めてしまっている。この結果、例えば首都圏の飲食店の経営のように、感染対策も経済対策も中途半端になり、どちらもその成果は上がらず、無力感といらだちの混じった多くの分断を、この問いは生むことになった。

私の生まれた佐渡は、観光で成り立っている。島外から人が訪れない限り、島は経済的に自立できない。しかし、島外から人を入れるという決断は、感染リスクを拡大するということでもある。命と経済のどちらを優先するか。やはり未だに、島民はこの答えを出せないでいる。

この問いが分断を生むのは、問いが感染症に立ち向かうための答えを二つに限定してしまうからだ。それ故、この問いは間違っているのだが、その理由について、一つは問いの平等性の問題から、もう一つは第三の選択肢の存在から明確にしよう。

(一) 問いの平等性の問題

命か経済かの選択権は、全ての人に平等に与えられている訳ではない。よってこの問いを全ての人に当てはめて考えることは

できない。テレビで、重い基礎疾患のある人のインタビューを見た。感染は死を意味するので、怖くて全く外に出られないという。重い基礎疾患を抱える人には、命を選ぶという選択しかない。また、逆に貧困に喘ぐ人はどうだろうか。お金がなければ生活できず、そのような人にとっては、経済を選ぶという選択しかあり得ないだろう。矛盾するようだが、生き延びるために、命を賭して働くしかないのだ。このように考えると、命か経済かの選択は、彼らのどちらかの死を意味する。すなわち、この問いそのものが、彼らにとっては凶器となるのだ。スラヴォイ・ジジェクが「自宅待機生活ができるのは人口の半分がそれ以下である」(注2)と指摘するように、命か経済かの選択を自由に選べる人は、実は一部の裕福で健康な人だけだ。パンデミックは、決して、誰に対しても平等ではない。

この問いは、選択肢すら与えられない多くの人々を切り捨てることになる。しかし、多くの人々はそのことにさえ気づいていない。物事を命か経済かの二極でのみ考え、その振幅の範囲内でしか思考できなくなってしまうからだ。こうした二元論による思考の硬直化は、アビジット・V・バ

ナジーとエステル・デュフロ（以下バナジール）が指摘するように（注3）、世界中で蔓延している。そして、議論のステージに上がることさえ拒み、自分の考えを正当化し、対極にある考えを否定することで、多くの分野で深刻な分断を生んでいる。

複雑な物事を単純化してみろという発想は重要だ。確かに、物理学などは、こうした考えにより発展してきた。しかし、人間を相手に物事を考えるときは、時には複雑な事象は複雑な事象のまま見なければいけない。なぜなら、複雑な事象を単純化するということは、何かを切り捨てて考えるということに他ならないからだ。その切り捨てるものが、命であってはならないのは無論のこと、人の営みや悲しみなどの感情、そして尊厳などであってはならない。

（二）第三の選択肢という希望

この問いには、出口治明がヘーゲルの弁証法について述べたように、「テーゼとアンチテーゼを綜合した新たな段階の存在」（注4）による第三の選択、という希望が存在する。よって二者択一のみを求めるこの問いは間違っている。マルクス・ガブリエルが二元論について批判するように、「二

つの実体が存在すると考えるのであれば、実体の種類が二つより多くはないということとを、一体どこから知るのか」（注5）ということだ。

私は、その第三の選択を次のように提案する。「経済成長を一時的に少し緩やかにしても、生活の質を変え、世界から不平等をなくすようにシフトすべき」であると。命か経済かを選択しなければいけない袋小路に入り込んでしまうのは、経済成長を絶対視し、その成長を無理に不要不急なもので回そうとするからだ。それは例えば、不要不急な外出を控えましょう、という感染症対策と真つ向から対立する。それよりも、まず、医療や農業、日用品の販売輸送などエッセンシャル・ワークと呼ばれるものに、お金と社会的リソースをかけ、パンデミック下でも皆が安心して生活できるようにするべきだ。そしてそれと並行して、不要不急の産業に対して、それらで働く人の尊厳と生活を守りながら、スローダウンしていく。経済成長は緩やかになるだろうが、不平等は減少するだろう。その過程で生活の中心を物質的な幸福から、人と人とのつながりや人の尊厳など、精神的な幸福を共有する方向を模索していく。マイケル・サン

デルは「勝ち組と負け組の間に深刻な分断がある現在、パンデミックでは、私たちがお互いを必要としており、高いレベルでの社会的連帯が必要である」（注6）と述べている。不平等をなくし、人と人とのつながりや尊厳を道標に、社会的連帯を作っていくのだ。

本当に、そんなことができるのか。これらはけつして夢物語などではなく、実現可能であることを、バナジールはその著書絶望を希望に変える経済学（注7）で示した。それは、もともと現在世界が抱える不平等の問題の解消へのアプローチでもあった。このことについては、次の第三項で述べる。

このパンデミックは、私たち人間が、いかに不要不急のものに依存していたかを浮き彫りにした。たとえその不要不急なものが、マルクス・ガブリエルの言葉のように「他者の苦しみ」に繋がっていくように。しかし、だからこそ、パンデミックと闘うためには、「他者の苦しみ」を理解することが第一歩となるのだ。

命か経済かの問いは、間違っている。そして、この問いから生まれる世界観も、それ故に二極化したこの世界も間違っている。私たちは、このパンデミックの渦中に

おいて知を結集し、不平等を解消し、連帯しなければいけない。

三 絶望を希望に変える知

世界の貧困状況は間違いなく改善している。

ハンス・ロスリングからは、その著書『FACTFULNES』で、一日一ドルから二ドルで生活する極度の貧困は、ここ一四〇年の間人類の約八五%から九%と大幅に改善しているという(注8)。また、世界銀行の発表でも、国際貧困ラインである一日一・九〇ドルで暮らす人の割合が、一九九〇年から二〇一五年にかけて年一ポイントのペースで減少し、二〇一七年には九・二%に達した(注9)。

ところが、このパンデミックで貧困率が逆戻りしているという。同じ世界銀行の発表になるが、二〇二〇年の貧困率は、目標値七・九%に対して二〇一七年の水準の九・二%に戻ってしまったという。更に二〇二一年の予想値では、新たに極度の貧困に陥る人の数が、およそ一億一九〇〇万人(一億二四〇〇万人に上るという(注10)。ユニセフの二〇二〇年五月の発表も、同じことを述べている。ユニセフは、このパンデ

ミックの影響により、二〇二〇年末までに、最大八六〇〇万人の子どもが新たに貧困に追い込まれる恐れがあるという(注11)。

このように増加する貧困に加え、経済的不平等も拡大している。バナジーらによれば、アメリカでは一九八〇年ごろから、不平等が拡大する兆候が始まったという(注12)。またこの不平等の問題は、アメリカ

だけでなく全世界で深刻なものとなっている。宮崎勇と田谷禎三は、『世界経済図説第四版』で「ジニ係数」と呼ばれる数値を用い、各国の国内の所得格差について論じている(注13)。「ジニ係数」とは、所得分配の不平等度を測る指標で、〇から一の値をとり、〇に近いほど格差が小さいことを示す。また、係数の経年変化において、その数値が正の変化をすれば、所得の不平等度が高まったことを示す。この本の一九九ページの表やグラフをまとめ、各国の一九九〇年半ばから二〇一七年までのジニ係数の増減を大まかにとらえたのが、添付した資料の表(六八ページ)だ。ただし、この表で「増減」の数値は、元の一九九ページ

はずだ。この表をみれば、ほとんどの先進国で「ジニ係数」が増加していることがわかる。つまり、ほとんどの先進国で不平等が増加していることだ。また「ジニ係数」が大きく減少した国もあるが、そのほとんどの国が、もともとジニ係数が〇・五程度あった国で、必ずしも不平等が解消しているとは言えない。

バナジーらは、不平等の解消に向けて二つの提案をしている(注14)。一つ目は、経済成長は貧困を改善したが、不平等を広げることになったと指摘し、ならば「取り憑かれたように成長をめざすことはやめよう」という提案である。二つ目は「不平等な世界で人々が単に生き延びるだけでなく、尊厳を持つて生きていけるような政策を設計する」という提案だ。そしてその具体的な政策として、貧困国ではユニバーサル・ベーシックインカム(UBI)が有効であるが、富裕国では働く人の尊厳を尊重した柔軟な雇用・再雇用政策と教育が有効であると指摘する(注15)。これらの提案は不平等の解消を目指したものであるが、パンデミックの渦中にある私たちにとって、もよい解決策となる。前項で述べたように、パンデミックと闘うためには、たとえ経済

成長を一時的に緩やかにしても、不平等をなくし、お金や社会的リソースを社会的な連帯をつくることに充当していくことが適当であると考えるからだ。そして、パンデミックに負けないためには、生活の中心を物質的な幸福から、人と人とのつながりや人の尊厳など、精神的な幸福に価値を見出す必要があると考えるからだ。

こう考えると、パンデミックという問題は、世界を抱える不平等や分断による二極化の問題を、改めて私たちに考え、見直すよう突き付けたことになる。パンデミックの渦中にある今こそ、私たち人間が公正で人間らしい世界をつくれるかどうか、その力が試されている。ダニエル・コーエンは、このパンデミックの渦中において、幸福な社会とは「人間としての生活に最低限必要なものが何なのかを見据え、誰もが社会と調和を保ちながら生きられる社会である」と述べている(注16)。それは、極めてあたりまえのことだ。公正で人間らしい世界をつくる鍵は、実は私たちの身近にあると、私は考える。

四、パンデミックのその後へ

最後に、このパンデミックがもたらした

意味と、未来に向けて私たちができることを考えてみたい。

このパンデミックは、私たちが今まで考えてきた「幸福とは何か」について、その見方を大きく変えるきっかけとなった。以前は、どちらかというとお金や物質的なものを追い求めていた人も、それが叶わなくなり、ロックダウン等で人に会えなくなることで、逆に人と人とのつながりをより強く意識するようになっていく。命の危険が脅かされることで、幸福の意味を真剣に考え、その結果、幸福を精神的なものに求める人が多くなった。このパンデミックの渦中において、幸福というものをどのように捉え、実現していけばよいか。ユヴァル・ノア・ハラリは、「学者たちが幸福の歴史を研究し始めたのは、ほんの数年前のことだ、現在私たちがまだ初期仮説を立てたり、適切な研究方法を模索したりしている段階にある。(注17)」という。ハラリのいうとおり、幸福について明言することは難しいのかもしれない。そして、少なくとも自然科学や経済学等の学問だけでは答えは出せなくて、哲学などの学問も含めた総合的な分析が必要になるのかもしれない。出口治明が哲学を学ぶ理由(注18)について述べ

ているように、パンデミックの渦中にある現在を理解するには「世界をトータルに理解する必要」があるからであり、哲学は「人類の知の葛藤から生み出されたもの」であるからだ。私たちは、もつと学ばなければいけない。しかしいずれにせよ、このパンデミックが、人間にとって本当の幸福とは何かについては、私たちに考えさせるきっかけとなったことは間違いない。リンダ・グラットン氏は、近い将来多くの人が一〇〇年以上生きることにすると述べる(注19)。そしてそのような未来の社会では、お金などの有形資産の他に、お金の換算できないスキルや知識、肉体的・精神的な健康と幸福、人間関係などの無形資産がより重要になってくるといふ。多くの人が一〇〇年以上も生きる未来に向けて、パンデミックの渦中にある私たちが、本当の幸福について考える、その意味は決して小さくはないはずだ。

未来に向けて私たちができることは何か。寺島実郎の言葉を借りる。寺島によれば、それは「時代認識との格闘」であるという(注20)。寺島は、今自分が生きていく時代を的確に認識することは容易なことではないと言いつつ上で、多くの先人た

ちも時代認識を求め格闘し、必ずしもの確
ではないかもしれないが、それぞれが腹を
括った判断をしていたと述べている。パン
デミックの渦中にある現在という時代をど
のように捉えるのか、それは難しい作業に
なるう。しかし、パンデミックの渦中にあ
るからこそ、この時代と格闘し、全ての人
との連帯に向けて、自分のできることを見
極めていかなければいけない。寺島は更に、
一〇〇年前を生きた明治の先達たちは「国
家の目標と自己の目標を一体化できる環境
にあった」とし、現代に生きる我々は「自
らの意思と努力で人生の目標を発掘しなけ
ればいけない」と続ける(注21)。厳しい
指摘ではあるが、時代認識と人生の目標を
重ね合わせることは、更に大変な努力が必
要になるだろう。しかしだからこそやりが
いがあるのであり、パンデミックの渦中に
ある私たちの生きる価値もそこにある。

私は、将来大学へ行き、経済学について
勉強したいと考えている。そんな私に知人
が一冊の本を紹介してくれた。アビジット・
V・バナジーとエステル・デュフロ著『絶
望を希望に変える経済学』である。この本
は、私の考えに希望と翼を与えてくれた。
そして、この論文を書くことを後押しして

くれた。感謝を述べたい。そしてこの本は、
今もパンデミックの渦中にある私たちを限
りなく励ましてくれていると、私は信じて
いる。希望はいつも絶望の隣にある。

参考文献

〈引用文献〉

- 1 クーリエ・ジャボン編、『新しい世界
世界の賢人16人が語る未来』、講談社現
代新書、二〇二一年、(注1) 一八三頁
より、(注2) 二一五頁より、(注6) 一
九二頁より、(注16) 一二三頁より
- 2 アビジット・V・バナジー、エステル・
デュフロ著(村井章子訳)、『絶望を希望
に変える経済学 社会の重大問題をどう
解決するか』、日本経済新聞出版、二〇
二〇年、(注3) 八頁より、(注7) 三二
八〜三七七頁、三九八〜四六一頁より要
約、(注12) 三四四頁より、(注14) 三七
六頁より、(注15) 四三二〜四六一頁よ
り要約
- 3 出口治明著、『哲学と宗教全史』、ダイ
ヤモンド社、二〇一九年、(注4) 三六
五頁より、(注18) 六頁より
- 4 マルクス・ガブリエル著(清水一浩訳)、
『なぜ世界は存在しないのか』、講談社選
書メチエ、二〇一八年、(注5) 八六頁
より
- 5 ハンス・ロスリング、オーラ・ロスリン
グ、アンナ・ロスリング・ロンランド著(上
杉周作、関美和訳)、『FACTFULNESS
10の思い込みを乗り越え、データを基に
世界を正しく見る習慣』、日経BP社、
二〇一九年、(注8) 六七頁より
- 6 (注9) (注10) 世界銀行ブログチャ
ネルVoice「新型コロナウイルス感
染症が世界の貧困に与える影響」最新の
試算——2020年の総括と2021年
の見通し」[https://blogs.worldbank.org/
ja/voice/updated-estimates-impact-
covid-19-global-poverty-looking-back-
2020-and-outlook-2021](https://blogs.worldbank.org/ja/voice/updated-estimates-impact-covid-19-global-poverty-looking-back-2020-and-outlook-2021) より
- 7 世界銀行プレスリリース二〇二〇年一〇
月七日「新型コロナウイルス感染症によ
り2021年までに極度の貧困層が最大
1億5,000万人増加」[https://www.
worldbank.org/ja/news/press-release/
2020/10/07/covid-19-to-add-as-many-as-
150-million-extreme-poor-by-2021](https://www.worldbank.org/ja/news/press-release/2020/10/07/covid-19-to-add-as-many-as-150-million-extreme-poor-by-2021) より
(注11) ユニセフ ニュースバックナ
ンバー二〇二〇年五月二八日「新型コロナ

1990 年半ばから 2017 年までのジニ係数の増減^{※1}

【ジニ係数は×100した数値】

	国名	1990 年半ば	増減 ^{※2}	2017 年
1	南アフリカ	58.2	4.8	63.0
2	ブラジル	59.3	-6.0	53.3
3	メキシコ	47.5	0.8	48.3
4	フィリピン	47.6	-3.2	44.4
5	ペルー	53.4	-10.1	43.3
6	トルコ	44.7	-2.8	41.9
7	アメリカ	36.7	4.8	41.5
8	アルゼンチン	49.2	-8.0	41.2
9	マレーシア	49.1	-8.1	41.0
10	イラン	44.1	-4.1	40.0
11	イスラエル	38.0	0.9	38.9
12	中国	38.8	-0.2	38.6
13	インドネシア	31.1	7.0	38.1
14	ロシア	38.5	-0.8	37.7
15	タイ	40.6	-4.1	36.5
16	インド	34.5	1.2	35.7
17	イタリア	33.6	1.8	35.4
18	ベトナム	35.5	-0.2	35.3
19	エチオピア	30.5	4.5	35.0
20	イギリス	26.2	7.0	33.2
21	フランス	31.5	1.2	32.7
22	カナダ	30.2	2.1	32.3
23	日本	25.9	6.2	32.1
24	エジプト	33.0	-1.2	31.8
25	ドイツ	30.6	1.1	31.7
26	スウェーデン	21.0	8.2	29.2
27	オランダ	23.4	4.8	28.2
28	ノルウェー	25.1	2.4	27.5
29	ウクライナ	28.8	-3.8	25.0
30	ニュージーランド		7.8	
31	フィンランド		5.8	
32	ルクセンブルク		5.7	
33	オーストリア		4.4	
34	デンマーク		3.7	
35	オーストラリア		1.6	

※1 宮崎勇、田谷禎三『世界経済図説第四版』P.199

ジニ係数、ジニ係数の変化、新興国・途上国のジニ係数の変化、OECD 諸国のジニ係数の変化より、福井が改編。

※2 数値は、※1の表より、目分量で推定した数値を含む。よって、あくまで傾向をつかむための大まかな数値である。

ナウイルス 貧困層の子ども8、600万人増加のおそれ ユニセフなど、家庭への支援訴え」<https://www.unicef.or.jp/news/2020/0134.html>

8 宮崎勇、田谷禎三著、『世界経済図説

第四版』、岩波新書、二〇二〇年、(注

13) 一九八頁より

9 ユヴァル・ノア・ハラリ著(柴田裕之訳)、『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福 下』、河出書房新社、二〇一六年、(注17) 二四〇頁より

10 リンダ・グラットン、アンドリュースコット著(池村千秋訳)、『LIFE SHIFT』、東洋経済新報社、二〇一六年、(注19) 一二五～一二七頁より

11 寺島実郎著、『二十世紀と格闘した先人たち 一九〇〇年 アジア・アメリカの興隆』、新潮文庫、二〇一五年(注20) 三八二頁より、(注21) 三八三頁より

〈参考文献〉

※引用文献に同じ。

12 ユヴァル・ノア・ハラリ著(柴田裕之訳)、『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福 上』、河出書房新社、二〇一六年

13 エステル・デュフロ著(峯陽一、コザ・アリーナ訳)、『貧困と闘う知 教育、医療、金融、ガバナンス』、みすず書房、二〇一七年